

かぞくのじかん

冬 Vol.22
2013 / Winter
婦人之友社

冬の手づくり
ペーパー
ビーズ

特集

今日から役立つ

片づけ お掃除 練習帖

台所から身につく片づけの基本・山崎美津江

忙しくてもきれいを保つシンプル掃除

“まとめ上手”で、使う・戻すが心地よく・高吉洋江

片づけて得をしたこと

年末家事予定表



家の整理は心の整理●山崎美津江
新・まほう使いの台所●馬 衣真
シンプル・おやつパウンドケーキ●土居恵子
お父さんミーティング●窓拭き・掃除機かけ
大きくなあれ●気仙沼の「冒険遊び場」
わたしの大切なもの●富永みーな
えほんの誕生日●ひぐちみちこ



子育ても仕事も、うまくばかりいかななくていい

林恵子

(NPO法人ブリッジフォースマイル代表)

タカミヤユキコイラスト

「ワークライフバランス」仕事と生活の調和。男女がともに、仕事、家庭生活、地域生活、自己啓発などをさまざまな活動を自らの希望に沿って展開できること。

仕事と子育ての両立に焦っていた私

親から存在を否定されたり、殴る蹴る、もしくは性的な暴力を受けたり、食事を与えられなかったり。虐待を受けた子どもたちの多くは、児童相談所に保護された後、親と離れて児童養護施設で生活をします。私の仕事は、そんな子どもたちも含めて、退所後の自立した生活をサポートすること。2004年12月に立ち上げたNPO法人ブリッジフォースマイルでは、現在、20代〜60代までの社会人ボランティア約250名が、首都圏の児童養護施設で生活する中高生や施設を退所した若者を支援しています。

こんな風を書く、私がさも立派に、志高く仕事をしていると思われがちなのですが、大きな誤解です。NPO立ち上げのころ、30歳を目前に控えた私は、思い通りにならないキャリアと子育てに悩み、二人の幼い子どもたちに対して怒鳴ったりときどき手を挙げたり、離婚を覚悟するほどの激しい夫婦喧嘩をしていました。

育児は、子どもがかわいいだけじゃ済まされない、忍耐が求められる。イヤイヤばかりで言うことを聞かない、一生懸命作った離乳食をべつと吐き出す。飲み会のお誘いは全部お断り。楽しいことも我慢しなくちゃいけない。産休から復帰後、残業をできず、責任ある役割を任せられない状況に対しても、焦りの気持ちがありました。

児童養護施設との偶然の出会い

私が児童養護施設に出合ったのは、そんな悩みの中でした。意義のある仕事をした、と考えた私は、社会起業家になるため、子連れMBA留学を目指すことにしました。どんなにたいへんだとしても、自分のキャリアを諦めたくなかったのです。英語力を磨くために参加したビジネス研修プログラムで偶然にも児童養護施設の調査をする機会を得て、衝撃を受けました。日本にこんな現状があつたなんて！ 親から虐待を受けた子どもたちは、親と離れて生活し、彼らの心の傷はその後の人生にまで大きな影響を及ぼしていました。

また、そんな子どもたちを支える職員たちも、勤務環境の厳しさや精神的負担に悩んでいました。

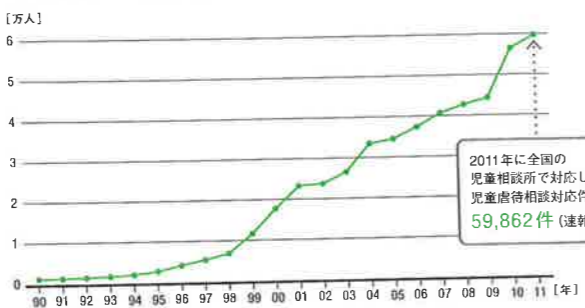
使命感というのでしょうか。子育てとキャリアに悩んでいた私にとって、他人事とは思えませんでした。

虐待による「心の傷」の影響

虐待を受けた子どもは、他者と関係を築くのが苦手です。ちよつと注意を受けると「敵」とみなして攻撃または拒絶したり、逆に支援者に依存しすぎてしまったり。また、自尊心の低さも特徴的です。幼い子どもが虐待を受け止めるため「自分が悪いから叩かれるのだ」「自分は生まれてきてはいけなかったんだ」と歪んだ解釈をするうち、「どうせ自分なんて……」と自分を大切に思えなくなっているのです。

児童養護施設では、まず安心安全な場所を提供し、基本的な生活習慣を身につけさせるよう支援します。親代わりとなる職員は、子どもたち一人一人の心に寄り添い、「あなたが悪かったんじゃない」「あなたは大切な存在」と伝え続けます。心の傷は、問題行動として表出すること

児童相談所での児童虐待相談対応件数の推移 厚生労働省HPより



「巣立ちプロジェクト」では、退所を目前にした高校3年生が、1人暮らしに必要なことを学びます。

も多く、暴力、ケンカ、万引き、引きこもり、援助交際などの問題にも、根気強く対応しなければなりません。そして、18歳の春。児童福祉法に則って多くの若者が「自立」していきます。最近、少しか運用が柔軟になり、特例的に延長が認められるようになりましたが、心の傷が癒されただかどうか、社会に出る準備ができたかどうか、明確な判定基準があるわけでもありません。

「自立を支援すること」の難しさ

NPO設立から8年。退所後に子どもたちが生活するための知識を支える「巣立ちプロジェクト」、ネットワークづくりを支援する「アトモプロジェクト」、進学を資金と意欲の両面で支える「カナエール」などのプログラムを生み出してきました。メンバーのほとんどが社会人であるという強みを生かして、活動は中高生、退所者を対象にした「自立支援」に特化しています。でも、当初思い描いた通りにはなかなか進みません。そもそも「自立」ってなんでしょう？ 「親と一緒に暮らしている人は？」「仕事をしてない主婦

は、自立していない？」「料理や洗濯ができない人は？」「持病のある人は？」「頭痛薬はマルで、精神安定剤はバツ？」……。

「あなたは自立していますか？」と聞かれ、自信を持ってイエスと答えられる人がどれだけいるでしょう。そんな難しいことを18歳をこその若者が突きつけられています。

私たちが支援する若者たちの中には、施設を出た後、数カ月で仕事を辞めてしまう人もいれば、せっかく入った大学を中退してしまう人もいます。警察のお世話になる人や、援助交際で妊娠し中絶したり、シングルマザーになったりする人もいます。でも、彼らが支援者側の期待を裏切った、自立支援はうまく行かなかった、などと結論づけるのは、間違っています。失敗したって、またやり直せばいいだけの話。それは子どもたち一人ひとりの人生のうち、一時期の状態に過ぎないのだから。

失敗を恐れ、

成果を求めすぎない

これは施設の子どもに限ったことではないと思うのです。私たちの子

育ては、「少しでも優秀に」とか、「失敗のない子育てを」と求めるあまり、親も子も息苦しくなっていないでしょうか。

長い人生、何もかも思い通りに行く訳がないのだから、失敗しても立ち上がる経験が大事。料理中、包丁で指を切ったら、止血の方法と絆創膏の巻き方を教えればいい。受験がうまくいかなかったら、挫折を味わう経験は無駄じゃない。そして失敗を受け容れ、一人ひとりの可能性に寄り添い続ける人がいると信じられることが、子にも親にも安心感となり、もう一度チャレンジする勇氣につながるのではないかと思います。

今の私は、子育てや人生について悩みながらも、肩の力を抜いて楽しめるようになりました。

はやしけいこ
津田塾大学卒業後、人材派遣会社パソナに入社。ブリッジフォースマイルを創設し、パソナを退職。養護施設退所者の自立支援、社会への啓発活動を軸に、多彩なプログラムを提供している。12歳と10歳の子の母。著書に『できるかも』（英治出版）がある。
<http://www.b4s.jp>